

ご め ん ね 【高学年 4 - (5)】

- 家庭との連携を図った取組み -

(1) 主題名 家族の幸せ [4 - (5)] 関連項目 [3 - (2)]

(2) ねらい 父母，祖父母を敬愛し，家族の幸せを求めて，進んで役に立とうとする心情を育てる。

(3) 資料名 「ごめんね」

(4) 授業の展開例

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留 意 点
導 入	1 普段の家族との過ごし方を発表する。	今まで，家族の言葉で「うるさいな」と感じたことはありませんか。	資料に入る前に，さなえの気持ちを感じ取りやすくするために，個々の体験を共有する。
展 開	2 資料を読む。	「お母さんなんか大きらい」と言ったさなえの心を考えてみましょう。 ・いちいち子どものように言われていやだ。 ・私の気持ちを考えてないんだ。	さなえの満たされない思いとわがままな思いに気付かせる。
	3 見えなかったお母さんの気持ちを知ったときのさなえの言動を考える。	さなえは，「お母さん・・・」のあと，どんな言葉を言おうとしたのでしょうか。 ・お母さん，お母さんの気持ちがわからずにごめんね。 ・お母さん，私のことをこんなに思っていてくれてありがとう。 ・お母さん，もっとお母さんのこと考えてお手伝いするよ。	その場面の雰囲気を感じながら発言できるように，教師が前文を読む。 「さなえは，読んでいるうちに，～」(資料後ろから 3 行目)
	4 自分の生活を振り返る。	「心のノート」に書いてあるように，自分の成長の陰には，おうちの方の温かい心があります。自分の生活を振り返ってワークシートに書いてみましょう。	振り返りがしやすいように，事前に「心のノート」 P 65 を書いておく。 ワークシートを用意する。
終 末	5 「心のノート」 P 89 を静かに読む。	読みながら，おうちの人の姿が心にかぶといいですね。	ことばを味わい，余韻をもって終わる。

「ごめんね」

「お母さんなんか大きい。」

さなえは、今ごろなぜか、お母さんの言うことがいちいち頭にきます。朝お母さんがいそがしいのはわかっています。でも「早く起きなさい。」から始まって「早く学校へ行く準備をしなさい。」のんびりしていると、学校が始まっちゃうわよ。」と次々、声をかけてくるのです。ゆっくり、朝ご飯を食べる気持ちにもなりません。

「もついい。学校へ行く。」

毎日、けんかをするように、家を飛び出しているさなえです。

「友だちのおうちのお母さんは、やさしいだろうな。お母さんなんて、わたしの気持ちを全然わかっていないんだから。」

そんなことを思っただけで、ぶんぶんしてくるさなえでした。

「おはよう、さなえ。なんかごきげんなめね。何かあったの。」
なかよしのよう子が声をかけてきました。

「聞いてよ、よう子。うちのお母さんたら、朝起きてから寝るまで小言ばかり。うるさくてかなわないのよ。ほつといてくれればいいのに。」

「そうそう、うちもそうよ。服を買ったときだって、それはでたとか、こっちの安いのにしておきなさいとか、何にもわかつちやいないのよね。」

「どこも同じね。こんな親をもつと子どもが苦労するわよね。」

と、おとなぶつて話をしていると、いつの間にか心が落ち着いていました。

学校から帰ってみると、お母さんがいません。おなかがすいたので、おやつを探していると、たなから古いノートが落ちてきました。

「あれ、何のノートかな。」

とのぞいてみたら、こんな字が目にとびこんできました。

【ごめんね。さなえ。】

さなえは、自分の名前があったので、どきつとしました。

さなえは、病気で生まれました。だからお母さんは、あなたを生んだときから、はなればなれにならなければいけませんでした。生まれたばかりのあなたをだいて、お乳を飲ませることもできず、お母さんは泣いてばかりでした。

でも、病気のあなたは、毎日点てきをして、いたい手じゅつも受けて、一生けんめ

い生きています。お母さんもがんばらなくてはいいけませんね。手じゅつのあとのきずを見るたびに、お母さんはつらくなります。代わるものなら代わってやりたいと思います。幸せでいてほしいのに、病気の苦しさを味わわせて、ほんとつにごめんねと心から思います。

そんな出だしの後に、入院中の点てきの量や飲んだお乳の量が記録しており、小さいころのさなえの入院記録が続いていました。

また、初めてつたい歩きをしたこと、小学校に入学した時のこと、二年生で作った工作のことなど、さなえでさえわすれているようなことが、お母さんの字で、ていねいに書かれています。

さなえは、読んでいるうちに、いつの間にか、なみだが出ていました。そして「お母さん……。」とつぶやいていました。



活用に生かすための実践報告

「ごめんね」

1 主題の設定

家族は、人が生まれて初めて所属する集団である。また、家庭は、子どもにとって、温かい愛情で保護され、慈しまれる場所である。

家族とともに、そばにいるのがあたりまえのように生活していると、目に見えない広く深い愛情や自分に寄せられる愛情に気付きにくいものである。また、家族への甘えや、自己中心的な考えで、家族の幸せを考えない言動をとることもある。

本資料は、母の忙しい毎日を知りながらも、日常に出てくる母の言葉をうとましく感じているさなえが主人公である。偶然見つけた母の古いノートから、母の深い愛情に気付くという内容である。

心から自分に寄せられる愛情に感謝する気持ちは、家族の幸せを考えて、進んで役立ちたいと思う気持ちの原動力になると考えた。そのような気持ちの持てる契機になることを願っている。

2 指導過程の工夫

「心のノート」は、自分の生活を振り返るときに活用していく。そして「心のノート」を記入するために、事前に家族と話し合うことで、家族に支えられている自分を感じ取りながら学習が進められるようにした。

自分の生活を振り返るところは、自己との対話を深めるためにも、書く活動を取り入れた。

終末では、「心のノート」P 8 9 を静かに読むことで、余韻をもたせて終わるようにした。

3 発問の工夫

「さなえは『おかあさん、・・・』のあと、どんな言葉を言ったのでしょうか。」という中心発問に対して、素直な気持ちが出しやすいように、教師がナレーター役をする。つまり「さなえは、読んでいるうちに、いつの間にか、なみだが出ていました。そして」までを教師が読み、その後「お母さん、」と言うように、児童にさなえの言葉を語らせる。

4 児童の反応（授業後の感想）

- ・よく思うと、お母さんにありがとうということは、いくらでもある気がします。おこられても自分を思っている気持ちからなんだと分かった。お母さんが大切だ。
- ・私も、「お母さん大きらい。」「うざいな。」と思うことはあったけれど、自分の事を思ってくれていると思うと、「ごめんなさい。」と言いたくなりました。
- ・お母さんがわかってくれないんじゃないくて、自分がわかっていないと思った。
- ・お母さんが、私のこと一番わかっているんだと思った。

5 実践者からの一言

書く活動では、高学年ともなると、家族から日常してもらうこと以外にも、精神的な悩みを相談して一緒に考えてくれたことや自分を受け止めてくれていることに感謝している内容が見られた。

表面的な会話や日常生活では気付きにくい「家族の愛情やすばらしさ」を「心のノート」の詩で味わい、余韻を持って終わることがよかった。

（古市小学校 藤本嘉江）